200歳 万歳！

200歳まで生きる会
H十九年八月第十五号

最後に見つけたもの、それは健康長寿の玉手箱でした！

このたび「200歳まで生きる会」の副会長を仰せつかりました濱須光由です。これまで、さまざまな健康法や健康商品を皆さんにお勧めしてきましたが、先月号で七田先生にご紹介いただきました「放射線ホルミシス」の健康効果によって、まったく新しい流れができるのではないかと感じています。

まずは私が歩んできた大波小波、途中、凪（なぎ）あり！の人生話に、少しお付き合いください。

手がける商品が次々に大ヒット

〝大物を当てるヒットメーカ〟と言われたことがありました。最初の大ヒットはカラオケの前進となる「ジュークボックス」。小銭を入れて好きな音楽が掛けられる装置です。昭和42年に売り出し、当時のトヨタマークⅡの倍以上の価格にもかかわらず、8000台売れて生産が追いつかないほどでした。

この権利を売って始めたのが、ドイツではさっぱり売れていなかった通称「いぼいぼサンダル」、健康サンダルの輸入販売です。小さな突起が足裏のツボを押して気持ちよく、月に30万足も売れた大人気商品となりましたが、類似品が出てあえなく収束。

さて、足のツボも大事なら、背骨はもっと大切と、寝ながら健康になる寝具「キャップロール」を開発。ツボ刺激の突起が付いた布団（イボイボサンダルのアイディアですネ）に、当時、東大医学部教授の大島正光先生からの助言を受けて、マイナスイオン発生装置を付加し、薬事法医療認可第一号を取った正式な医療用具となりました。

またも大変な売れ行き。私は恐いモノなしで、意気揚々と病院経営にも乗り出しますが、人からの頼まれ事を安易に引き受けるなどで、経営に混乱をきたし、年商380億までいった会社を手放すことになりました。

失意の中で微弱エネルギーの効果を知る

忘れもしない昭和天皇がお隠れになった年、私は心のキズを癒すためにドイツのロマンチック街道を旅しました。そこで目にしたのは美しいドナウの黒い森ではなく白髪だらけの病んだ森。当時の西ドイツでは森林被害が52％に及び、スウェーデンでは28、000以上の湖が魚の死滅した〝死の湖〟になっていたのです。

考えてみたら私たちの生活はエントロピー増大に加速し、環境を破壊してきました。日本に帰り東京農工大の戸塚研究室で農薬や食べ物の汚染の実態を知ります。

とにかく安全な食べ物を得るために、まず土作りと水が大事、薬石で水を作る研究を始め、水と波動を測る測定器に出合います。「これからは見えないエネルギーの時代だ」と、「サトルエネルギー学会」を起こしたのです。

学会での研究と共に、機能水や波動機器に携わり、波動農法に傾倒して、波動エネルギーが生命を司ることを目の当たりにします。ところが、巨大大根、15輪付きのユリの花を作るも、規格外の大きさで売れないと農協、農家から総スカン。大成功は大失敗！真理と見えた道のなんと険しいことよ。

この頃、学会で講演をお願いした電力中央研究所の服部禎男先生から「低レベルの放射線は人を健康にする」、ガンのネズミに低レベルの放射線を照射すると、ガンが治るだけでなく天寿を全うする、この効果を「放射線ホルミシス」というと聞いたのです。

この後、エベレストのような壁！を越え、ようやく放射線ホルミシス効果を誰もが得られる設備をご紹介できるようになりました。これを手にしたときに私は思いました。「浦島太郎は玉手箱で年老いたが、私が手にしたのは『ホルミシスの玉手箱』、これに入ると若返る、手に載らないほど大きな玉手箱だ」と。

これから放射線ホルミシスやさまざまな健康術などの話を織り交ぜてご紹介していきますのでお楽しみに。

濱須　光由　はますみつよし

1936年福島県生まれ。㈱新エネルギー研究所代表取締役会長。健康関連産業で数々のヒットを作り、マイナスイオン製品、波動機器、機能水などの開発に携わる。微細エネルギー（波動）を研究するサトルエネルギー学会を立ち上げ初代専務理事となる。炭酸泉や放射線ホルミシスの医学的効能の啓蒙活動を始め、現在、放射線ホルミシス効果を研究する「日本ホルミシス健康効果研究会」会長として精力的に活動を進めている。

特集記事

音楽療法

①音楽療法が目覚しく進んでいる

音楽に心身を癒す働きがあることがわかって、今、音楽療法が静かに広がり始めています。音楽療法は微細な波動エネルギーを発現させて、体に吸収反射させる音響療法で、波動音響エネルギー療法です。

音楽の響きは細胞に吸収させると、細胞を温め、酵素を活性化し、増殖させる働きがあるのです。細胞の水分を音の響きで暖め、みずみずしい細胞に若返らせ、若さと長寿を得させるのです。

音の源点は38度Cだということです。人の体温は36度Cですが、胎児は母親の羊水の中で育ち、母親の羊水の温度は38度Cで、胎児は羊水の中で音を振動音で聞いて育っているのです。38度Cという温度は、免疫力を高め、病気にならない温度だとされています。胎児は、生後90日間は体温を38度Cに保っています。

音は、耳で聞くのではなく、脊髄と肌で感じ、音響として聞くのが原点なのです。

ここに、数字の秘密があります。母親の呼吸数は1分間に18回で、この数字は海の1分間に寄せては返す波の数と同じ数なのです。体温はその倍数の36度C。心拍数は1分間に72回。血圧は144が高圧の上限です。

音響を脊髄に響かせることで、細胞・中枢神経・血液・リンパ液が温められ活性化し、心と身体を癒す力があるのです。

鼓膜に響かせる音ではなく、身体に響かせる骨導音であることが大切で、脊髄で感じ共鳴現象で聞くことが大切です。これを聞けば聞くほど共鳴が深まり、細胞の働きを変えていき、血液はさらさらになり、血流を流れ易くします。すると、血液の病気、がん細胞、ウイルス性の病気など、様々な病状が改善されてしまうのです。

音楽を、耳・骨・体全体で聞くようにすると、音楽が変わります。聴覚が変わりこれまで、感じられなかった音楽がわかるようになるのです。音楽の感じ方に革命が起きます。

音楽のわからない人は、音楽を耳で聞いていては駄目なのです。骨導音で聞くと聴覚が変わります。骨導音で聞くと音が自分の声として、体に響き、耳で聞くのではなく、体で聞き始めます。すると、深い感動を覚える共鳴波動となって、心に響き、感動を呼び覚ますのです。音響音を聞けば聞くほど感動が深まり、聴覚が変わるのです。

②温度は健康の鍵

音楽を音響音として、脊髄に響かせて聞くようにすると、中枢神経を熱くし、心や体を健康にする働きがあります。体温を1度C上げると健康になるという秘密があるのです。バイオリンの演奏者は絶えず音響音として自分の弾くバイオリンの音を聞いており、そのため体温が38度Cを超えることがあり、癌にはならないのが普通であると言われます。

通常の体温は、36・5度Cが普通ですが、バイオリン演奏中には37・5～38度以上に上がるのが普通なのです。

今、低体温の若者が増えています。低体温でいると、心も体も不健康になり、脳は正常に働かなくなってキレ易くなります。最近に若者や子ども達の低体温が問題なのです。冷たいアイスクリームを食べたり、氷入りのジュースを飲むことを習慣にしていると、腸壁が低体温になります。

腸壁が低温になると、ウイルスやバクテリア、おびただしい数の腸内細菌類が血中に入り込み、全身に運ばれ毒素として働きます。血中に入った腸内細菌は、全身の臓器に運ばれていき、脳もこ

の被害を招かれません。当然、思考回路はまともでなくなるので、子が親を殺す、親が子を殺す、生活に追い詰められると犯罪をして金を手に入れようとするという現象が当たり前に見られるようになるのです。低体温は不健康な思考の元となるのです。

非社会的な犯罪が増えてきているのは、食性を無視している現代の栄養学に問題があるのです。化学薬品の摂取を当たり前にしている現在の食生活を改めない限り、毎日、頭をおかしくし、行動を非社会的にする若者が増えていくのは、ごく当たり前のことになるでしょう。

現代は、排毒を積極的にしていくという考えが大切です。人間の細胞は60兆あり、毎晩1兆を超える細胞が入れ替わっています。

音響療法によって、この細胞の水が温度の影響を受け、すると、体内温が上がって、腸壁から毒素を取り込むことが少なくなります。温度が健康の鍵になるのです。

③音楽は医学を根底から変える可能性を秘めている

音楽には何故、心身を癒す力があるのでしょう。現代の医学は対症療法で、病んでいるところを薬で治すという考えでなされており、これは根本的治療ではありません。

病気を治しているのは人間自身の力、免疫力です。そのことが見直されて今は、免疫力が医療の中心に変わりつつあります。でも、まだその流れは緩やかである、と言えるでしょう。免疫を高めるのが本当の療法なのです。

新潟大学大学院の医学部教授　安保徹先生の本に「免疫革命」という本があります。この本の最初に「免疫学の歴史」が書いてありますが、免疫学は、まだ現代の医学では直接役に立っていない、皆無と言ってよい、と書かれています。でも、これからは免疫学がどんどん新しい地平線を開いていくでしょう。

免疫力について書かれた本には「免疫力を高める生活」という西原克成著（サンマーク出版）があって、こちらも優れた本です。

すぐれた音楽が何故、病気に効くのか。それは、人間の本来持っている免疫力を高めるからです。免疫力とはなんでしょう。自己治癒力です。自己治癒力にはリンパ液が大きく関わっています。

1960年代にリンパ球と免疫の関連が見つかって免疫学に新しい地平線が開けてきました。NK細胞（ナチュラル・キラー細胞）の発見も免疫学の発達に役立ちました。今、更に免疫を助ける色々な細胞が見つかっています。リンパ球の働きや生産に関わる遺伝子の研究なども進み、免疫学はどんどん向上発達しているのです。リンパ球の働きを助ける伝達物質、サイトカインの研究も進んできました。

リンパ液は体を細菌などから守る、免疫システムに関わっているのです。音楽を聴くと、その音響でリンパ液は温かくなり、活性化します。音楽には体を発熱させ、熱エネルギーを高め、体全体を暖める働きがあるのです。

病気になると、発熱するのは、体を発熱させ免疫力を高めるプログラムが自律神経とDNAに組み込まれているからです。音楽を体に響かせると、直腸は38・4度Cまで上がることが、研究の結果解りました。音楽はまた、NK細胞を活性化させ免疫力を高めることも解ってきました。

脊髄に波動を感ずるDNAがあるのです。脊髄には迫り来る危険を感じる力があって、波動で感じます。だから、危険が迫り来ると脊髄がそれを波動で感じ、ゾーッとするのです。感動も脊髄が感じます。

人は、音楽に何故、感動するのでしょう。脊髄が波動に共鳴して感動を呼ぶのです。バイオリンやドラムの音を聴くと、その音響が脊髄に響き人を感動の世界に導くのです。

人の音楽を感じる能力には、優劣があります。

名曲を聴いてもあまり感動しない人もいるのです。それは、音楽を感じる能力に差異があるからです。では何故、差異があるのでしょう。それは、音楽を空気振動音として聴いているだけの人と、骨導音として取り入れる能力を持っている人の違いなのです。

音響療法をして、音楽を脊髄に響かせ、体全体の細胞に共鳴させて聴かせると、聴覚が変わってしまいます。聴覚が変わると、脳力まで変わってしまうのです。

音楽は脳の血流障害を取り除く働きがあります。音楽には、脳をリラックスさせ副交感神経の働きをよくする力があるのです。生命をコントロールする自律神経が失調すると病気になりますが、音楽は自律神経の失調を癒し、自律神経は心をコントロールしているので、脳の病が癒え、それだけでなく頭の働きがよくなり、学習力が高まります。

ストレスや心をイライラさせることが続くのは、交感神経優位が長時間続くからです。ストレスが続くと、心をコントロールする神経が消耗し、脳の病を進行させます。

音楽を聞くと副交感神経が優位になり、心のストレスを消すので、心と脳に安らぎをもたらすのです。

生命活動と維持に関わっているのは脳幹ですが、脳幹は血液循環、体温調節に関わっており、音楽はその脳幹の働きを正すので、根本療法になるのです。音楽は、また、心拍数の調節や血液の収縮拡張に関わる延髄の働きを正しくし、内分泌ホルモン機能を調節する脳下垂体の働きも正し、全体的に免疫力を高め、脳の働きを正常にするので病を癒すのです。

脳は何故病むのでしょう、大きな原因は、脳の血液循環の悪さと血流障害にあります。脳に十分、血液がいかないと、ボケてきます。音楽は、脳の血流障害を取り除く働きがあるので、脳に癌腫瘍のあった60代の女性が、音楽を聴くことで、その腫瘍を消してしまったという話があるほどです。

健康な人でも1日に3000個程度、細胞が癌化するといわれます。それを、防いでいるのはNK細胞の働きによるのが多いのです。音楽はNK細胞の機能を高めるので、癌が消滅するということが起こるのです。

「脊髄神経」と「自律神経」を音楽の熱エネルギーで温め、
「心の病」や「うつ病」を癒す、世界で最も進んだ音楽療法です。

長寿健康法

ビタミンC健康法

ビタミンCには脳の細胞を再生する働きがあります。多摩病院の院長松家豊先生の研究があります。松家先生は1912年（明治45年）の生まれです。70歳を過ぎた頃から、ボケの症状が出てきて、会話が難しくなりました。言葉が浮かばず、相手の言葉を理解するのも難しく、思考がままにならない状態になってきたのです。

普通ならそのままボケてしまうところです。しかし先生は自分の体を実験台にしてボケ治療の開発に取り組まれました。多少思考力の鈍った頭で、医学関係の文献を読みあさりました。そして偶然三石巌氏の「ビタミンC健康法」に出合ったのです。その中で松家先生が注目されたのは「ビタミンCが学童の知能指数を高めるという効果がある」という記述でした。ビタミンCは子どもの頭を良くするのなら、ボケ老人の脳にも効果があるのではないかと考えたのです。本の中には「ビタミンCを摂ると、血中ビタミン濃度が高まるとありました」先生は早速、自身へのビタミンC大量

投与を試みました。

二日目に、具体的な変化が現れました。まず症状のひどかった歯ぐきからの出血、口内炎が治りました。わずかな体調の変化や気候の変化ですぐにひいていた風邪もひかなくなりました。そして耳がよく聞こえるようになったのです。

二ヶ月経過した頃には、ボケ症状の明らかな回復の症状が見られるようになりました。言葉が思い通りに浮かび、思考が明瞭になり、再び普通の会話が出来るようになったのです。松家先生は自分の受けた恩恵を他の老人に分け与えたいと考えました。そして自分の病院の入院患者150人全員にビタミンCの投与を始めたのです。

入院患者の平均年齢は84歳。1日0，5グラムからのスタートでした。半年した頃から目に見えて効果が現れるようになったということです。松家先生は、その研究・観察の結果を「ボケはビタミンCで治る」という本にして発表しています。

ビタミンCの研究は最近まで、案外なおざりにされていたのです。アメリカのポーリン博士はビタミンCの大量投与が、患者に劇的な効果を与えることを発見しました。ビタミンCをたくさん与えるほど良く、過剰に摂りすぎる心配は無いというのです。

新宿に病院を構える丹羽クリニックの丹羽正幸先生は、さらにその研究を発展させられました。先生はビタミンCは研究し尽くされていないことに気付き、1970年から研究に着手されました。

先生は健康の原点はビタミンCにあるとまで言われます。ビタミンCは脳に一番良く働くのです。ビタミンCは体のあちこちに存在します。どこに一番よく存在するのでしょう。それを先生は次の表のようにまとめておられます。

ビタミンCは身体のどこに存在しているか

身体の各組織のビタミンC濃度

組織	(mg/100g)	組織	(mg/100g)
脳下垂体	40～50	腎臓	5～15
副腎	30～40	心筋	5～15
水晶体	25～31	肺	7
脳	13～15	骨格筋	3～4
肝臓	10～16	睾丸	3
脾臓	10～15	甲状腺	2
膵臓	10～15		

食事から所要量程度のビタミンCを摂っている成人の値。
新生児はこれより高く、高齢者はこれより低い。
サプリメントから十分量を摂ると値は高くなる。

表にみる様に脳下垂体に一番よく存在するのです。ビタミンCは脳に一番良いのです。受験生の学習には、ビタミンCは絶対のお薦めだと先生は言われます。

ビタミンCは大量に摂ることが必要で、成人では100ミリグラムを摂るのが普通ですが、吸収率を高めるには大量の摂取が必要と、研究の結果を発表しておられます。

一度に1000ミリグラムから3000ミリグラムまで増量して摂るのが良い。美容の世界では3000ミリグラムから5000ミリグラム摂らせるのが当たり前になっていると先生は言われます。痴呆を治したければ、1度に1000ミリグラム以上を摂るようにしましょう。過剰に摂っても3時間も経てば、余分なものは体内から出ていくと考えられています。たくさん摂って体内に蓄積されることが大切なのです。少量で、ギリギリに摂っているだけでは不足なのです。体に蓄積されるようにすることが、もっとビタミンCを積極的に、有効に働かせる方法だと先生は言われるのです。

ビタミンCには肌をきれいにする働きがあります。アトピー性皮膚炎になる人は、ビタミンCの血中濃度が平均より低いのです。血液1dl中に平均0，5～1，5ミリグラム必要なのに6割の人がそれに達しないそうです。先生の病院には、どこでも治らなかったアトピー患者たちが訪ねて

来て、急速に良くなっていく治験例がたくさんあります。

でも、ビタミンCを摂っていても、少しも効果が無いというケースが多いのだそうです。それは摂っているビタミンCによるのです。摂るならアスクレというビタミンCを摂るようにすると良いということです。

ビタミンCは細胞の代謝の基本です。大部分は小腸から吸収されます。摂り方は吸収率を良くするために、朝昼晩の食後30分に摂るようにすること。1度に摂っても無駄になることもあるので、このように効率よく分けて摂るのが良いとアドバイスしておられます。ビタミンCには次の作用があります。抗酸化作用、活性酸素除去作用、コラーゲン合成作用、脂質代謝、神経伝達物質生成作用、抗ストレス作用、善玉コレステロールの作成、マクロファージを刺激しインターフェロモンを出す、免疫増強作用等々。

丹羽先生のところには、よその病院で治らない人々がたくさん訪れます。

丹羽クリニックの連絡先

http://www.niwa-clinic.com

Tel 03-3368-7587。

トピックス

正しい食物の知識

ナチュラル・ハイジーン(1)

ナチュラル・ハイジーンというのは、自然療法という意味です。ナチュラル・ハイジーンは、人生最高の健康哲学と言われています。ナチュラル・ハイジーンを続けていれば、人は健康な毎日を送り続けることができるし、かりに医師が「あなたはもう永くありませんよ」、と言われても、そこから蘇ることができます。

ナチュラル・ハイジーンの基本的な考え方は、「体は健康を求めていて、いつも努力しており有害な老廃物をすべて浄化することによって、それを成し遂げようとしている」というものです。つまり人間の身体は、常に自己治癒力が働いていて、病気になっていてもそれを癒し、健康を保ち続けることができるというのです。

このナチュラル・ハイジーンの力はすべての人の体の中に存在しているのです。「自然は常に完璧なもので、生命に関する法則を破った時に、不健康な問題が生じる」というのがナチュラル・ハイジーンの考え方なのです。

人が健康長寿を長く保ちたいと思うのであれば、ナチュラル・ハイジーンについて学習を続けていくことが非常に重要です。どんな病気になっても、人はナチュラル・ハイジーンを知って生活を改めれば健康回復出来る、と知っていればどんなに心強いことでしょう。

医師から「もう永くないでしょう」と言われたD氏はナチュラル・ハイジーンを学び、早速実行に移しました。そしてわずか一ヵ月後に、23キロの体重を減少したばかりかすっかり健康になりました。73歳のK氏はナチュラル・ハイジーンをするようになって年に一度の健康診断を受けたところ、「一体どうやって、全ての数値が大幅に改善されたのか」と医師をびっくりさせました。中性脂肪値、コレステロール値とすべてが正常で、あるいはほとんど正常だったのです。B氏はハイジーンを取り得れるまでの40年間は、活力や精力を失っていました。ところが、40回目の誕生日が近い今、それまでの40年よりずっと元気になり、これからの人生が楽しみになったと言います。S氏は、腎臓の具合いが悪く、治る見込みがなく、シカゴ中の高名な医師たちが、そう長くは生きられないだろうと言われていたにもかかわらず、ライフスタイルを改善したところすっかり健康を取り戻してしまいました。

では、ナチュラル・ハイジーンというのはどん

な健康法でしょう。それは果物を食べることが最も自然な健康法であるという考え方です。縄文時代の食事を考えてみましょう。その頃の食事は、健康補助食品、サプリメントやドリンクなどというものは存在していませんでした。彼らは果物が主食だったのです。果物ほど人類の健康にこれ程大きく貢献しているのに、多くの誤解や不当な評価、中傷を受けてきたものはありません。人は果物をまったく誤解しています。たんぱく質の過剰摂取が病気を生み出しているのです。たんぱく質の過剰摂取は有害な老廃物を作り、体内を過酸性にしてしまいます。これこそ病気の原因なのです。

果物は食べ物の中で、最も水分を多量に含んでおり、その水こそ生きた水で、単なる水ではなく、体の浄化に役立ち、生命力を与えてくれる水なのです。その上、人間が生命を維持していく上で必要なビタミン、ミネラル、炭水化物、脂肪酸のすべてを大量に含んでいます。果物の生命力には、他のどんな食物も勝ることが出来ないのです。

果物には体内に蓄積された老廃物を組織から速やかに排除する働きもあります。体をきれいに浄化させて、生命活動の全ての面で活力を与え、体はそれによって最大限の効率で機能することが出来るのです。果物の消化にはエネルギーをほとんど必要としません。

（つづく）

良書推薦コーナー

百円聴診器でよくわかる

豊沢　豊雄著

近代文芸社　1，300円

著者は今年百歳。社団法人発明学会の会長さんです。昔から、発明の本を書いて、発明の分野で大きく貢献された方です。終戦直後、発明立国を唱えて衆議院議員に当選。二期続けた経歴をお持ちです。豊沢先生は、発明の分野で日本の社会に貢献された功績は、抜きん出ておられます。発明に関する著書は数知れません。

その豊沢先生が百歳の今も、次々と新しい発明に挑戦しておられます。今もお元気な先生の唯一の悩みは、年ごとに聞こえにくくなる耳。その耳がよく聞こえる方法を見つけられました。それが、百円聴診器。30万円もする市販の精密な補聴器よりも、こちらの方がよく聞こえるというのですから、こたえられません。難聴の方にはどうでも読んでいただきたい本です。

この百円聴診器が誕生したエピソードを紹介しましょう。豊沢先生が昨年（2006年）親しい知人達に白寿の会（99歳の誕生祝賀会）を祝ってもらった時のこと、先生は耳が遠いので、ほとんど会話が出来ませんでした。相手の話が聞こえないからです。補聴器は3種類も、合計で70万円もの出費をして持っておられました。でもそれでも十分な会話が出来ないのです。現在の補聴器はみんなすべての音を拾うので、ガーガーと雑音がいっぱいで会話が出来ないのです。みんな補聴器を持っているのですが、その補聴器の効果はそんなわけで、めがねの10分の1もないと先生は言われます。

補聴器は最高の電子工学を使って作らなければ出来ないと誰もが思っています。ところがある日のこと、先生が孫のところに遊びに行くと、お孫さんが新聞紙をくるくる巻いて筒を作り、先生の耳にあてて「おじいちゃん、よく聞こえるだろう」と言ったのです。それを聞いて先生はビックリしました。20万円もする補聴器を使っていたのですが、それよりずっとよく分かったからです。先生は発明家ですからすぐこの新聞補聴器の理論を使い、安くてよくわかる補聴器を考え始めたのです。それで出来上がったのが百円聴診器です。それを使って会話をすると、声は大きくなるし、その上にとても澄み切った美声になるので、「美声拡大器」と名づけて売り出したのです。

初め安価すぎるので、誰も本気にしません。でもＮＨＫの教育テレビが取り上げてくれて、2回もその効果を証明する放送をしてくれたので、だんだん認知されるようになって来ました。

この百円聴診器を使って、自分の出した声を耳から自分の脳にストレートに入れると潜在意識にストレートに入って、学んだことが頭によく入り忘れません。また歌の練習に使えば、声がよくなりカラオケ上手になったり美声の声優さんになることができます。そのため朗読学習美声器という別名があるくらいです。

豊沢先生は、今も知的財産学校を創って、多くの人の指導に当たっておられます。長生きするのだったら先生のように生きたいものです。

行事のお知らせ

10月7日（日）、横浜ワールド・ポーターズで、２００歳まで生きる会の第2回大会が開かれます。会費及び、行事日程は次の通りです。（予定）

会　費　５，０００円

日　程　受付9時30分より

①10時開式

新役員の紹介

②10時10分～12時

七田眞会長の講演と実践セミナー

講演テーマ「２００歳まで生きる知恵」

実践セミナーはディクシャ（エネルギー伝授）を行ないます。

○昼食休憩12時～13時（会場内レストラン街で各自自由におとり下さい）

③13時～14時

服部禎男先生の話「ホルミシスについて」

④14時～14時30分

副会長　濱須由光さんの話

○休憩（10分）

⑤14時40分～15時40分まで

会員の自由トーク（一人10分）

お話したい人は、あらかじめ申し出てください。

⑥16時　閉会

この後引き続き同会場で16時30分より19時まで、ヒューマンサイエンス主催の講演会が行なわれます。参加自由（会費５，０００円）

講師　七田　眞

テーマ　「超感覚開発法セミナー」

編集後記

7月12日から19日までインドに行ってきました。インドの聖者カルキ・バガヴァンのワンネス・ユニバシティーでディクシャ（エネルギー伝授）を学ぶためです。

ここで学ぶと、奇跡が起きます。私も素晴らしい体験をして帰ってきました。お陰で、行く前と今ではパワーが十倍も違います。そのため、私が主催する右脳セミナーで、変化が起きています。ディクシャ（エネルギー伝授）を取り入れているからです。

セミナーでディクシャを体験した人たちの体験談を2、3紹介します。

インドから帰ってきた先生のエネルギーのパワーに圧倒されました。（Ｓ・Ｏ　男性）

先生はインドから持ってこられたパワーが、僕の中に入ったときにはビックリしました。白い光が僕と一体となった。というよりも、もともと一体であった白い光の存在に気付かされました。（Ｓ・Ｋ　男性）

ディクシャは以前受けたとき以上に、頭にまるで手が触れているような感覚と重さを感じました。パワーありがとうございました。（Ｉ・Ｋ　女性）

【発行人】
七田　眞

【発行所】
「２００歳まで生きる会」
〒695－0011　島根県江津市江津町527－5
☎０８５５－52－５３０１
FAX０８５５－52－５７９７